「海の交換手」
1967年、インク、水彩、紙
20・3チセン×32・0チセン
（難波田龍起氏寄贈）

名画の扉

大川美術館企画展「大川栄二生誕100年記念　コレクターの目」から

難波田史男（1941～74年）

新しい感性が出現し飛躍していった1960年代、難波田史男は、一人の無名の青年画家として、その内面に秘めた空想世界を、独自の描き方で探究し続けていました。兄・紀夫との九州旅行の帰途、不慮の事故により32歳の若さで急逝してしまいましたが、わずか15年の間に描かれた作品は2000点を超えます。

史男は、日本の抽象絵画を代表する画家・難波田龍起を父に生まれました。龍起氏は、大川美術館で見る史男の作品はいっそう美しく見えるといって、開館当時の当館に史男の水彩、ペン画を寄贈してくださいました。

「詩人肌の父龍起の画趣を土壌とし乍らも、彼の線は蚕の吐く絹糸の如く美しく、暖かく更に鋭く生きて居り、その色彩は正に『愛』である」。これは、初代館長・大川栄二が、当館で開催した難波田史男展によせた言葉です。本作は、次回企画展「大川栄二生誕100年記念　コレクターの目」で展示いたします。

（小此木）